

アジアの伝統芸能 第六回

白蛇伝の変遷

仏教説話からメルヘンへ



白蛇伝の謎

前回まで三回にわたり川劇『白蛇伝』を鑑賞しながら、中国伝統演劇のさまざまな技法について見てきた。

今回は中国四大民間故事の一つであるこの白蛇故事について、日本の民間伝承とも比較しながら、次の三つの謎について考えてみたい。



白蛇伝の謎

- 一、なぜ蛇と人間の恋愛なのか？
- 二、なぜ蛇に同情するのか？
- 三、この話は、人々に何を伝えよう
としているか？



白蛇伝の謎

- 一、なぜ蛇と人間の恋愛なのか？
- 二、なぜ蛇に同情するのか？
- 三、この話は、人々に何を伝えよう
としているか？



白蛇伝の謎

- 一、なぜ蛇と人間の恋愛なのか？
- 二、なぜ蛇に同情するのか？
- 三、この話は、人々に何を伝えよう
としてしているか？

仏教

南北朝時代

四世紀の初め、中国では五胡と呼ばれる周辺の諸民族が、漢民族王朝である晋を滅ぼし、中国の北半分を支配した。



仏教の時代

彼らは、漢民族の先進的な文化に
対抗し、言語も習俗も異なる諸民族
を統合するため、西域から仏教の僧
侶を招き、仏教思想による統治の強
化と安定を図った。



仏教と蛇妖伝説

仏教には五戒と呼ばれる五つの教えがある。これを人々にわかりやすく伝えるため、さまざまな仏教説話が誕生した。その一つに不邪淫戒(姦淫するな)を説話化した蛇妖伝説がある。

仏教の五戒

- 不殺生戒
- 不偷盗戒
- 不邪淫戒
- 不妄語戒
- 不飲酒戒



1600BC
1500BC
1400BC
1300BC
1200BC
1100BC
1000BC
900BC
800BC
700BC
600BC
500BC
400BC
300BC
200BC
100BC
0
100
200
300
400
500
600
700
800
900
1000
1100
1200
1300
1400
1500
1600
1700
1800
1900
2000

殷 1600BC頃-1046BC		
周 1046BC-771BC		
春秋戦国時代 770BC-221BC		
秦 221BC-207BC		
漢 206BC-220AD		
魏 220-265	蜀 221-263	呉 222-280
晋 265-316		
五胡十六国時代		東晋 317-420
北朝 439-589		南朝 420-589
隋 581-619		
唐 618-907		
五代十国 907-960		
遼	北宋 960-1127	
金 1115-1234	南宋 1127-1279	
元 1271-1368		
明 1368-1644		
清 1616-1912		
中華民国 1912-1949		
中華人民共和国 1949-		



唐代の蛇妖伝説「李黄」

北朝系の隋が中国全土を再統一すると、その後を受けた唐代、中国は仏教の黄金時代を迎えた。その中で誕生したのが、仏教の不正淫戒に基づく蛇妖伝説「李黄」である。

(唐)「李黄」(『博異志』)

唐代の蛇妖伝説 「李黄」

〔解説〕

唐代の蛇妖伝説「李黄」は、唐の鄭還古が編んだ志怪小説集『博異志』の中の一編。

『博異志』は散逸したが、宋代に李昉らが太宗の勅命を奉じて編纂した古代小説集『太平広記』にこの話が収録され、現在に伝わっている。

嘉慶丙寅年重鐫

天都黃曉峰校刊

太平広記

姑蘇聚文堂藏板

重刻太平広記序

將欲究心性之量極格致之功則必網羅天下靈枯古今俾知道法之妙杳杳冥冥審計之所不及者猶之布帛粟肉也事物之變怪怪奇耳目之所不經者猶之日用常行也昔公孫僂辨實流臺駘之顛末賈太傅召野宜室漢文且爲前席張司空臺氣而識豐城之劍凡若此者豈別有神明之術哉曩昔耳目之功深而載籍之資廣也夫載籍之發漢唐而後率推北宋太平興國時勅撰崇文院積書八萬卷有奇尚命儒臣纂修編輯自經史子集以及百家之言博觀約取集成千卷賜名曰太平御覽又以道藏釋藏野史釋信之類廣採兼收集爲五百卷賜名曰太平廣記詔鈔板頒行言者謂廣記非後學典故要東板藏本清

唐代の蛇妖伝説 「李黄」

元和二年（八〇六）、隴西の李黄
——塩鉄使の李遜の甥である——が、
吏部の人事詮衡のとき、暇にまかせ
て長安の東市に出かけた。

（唐）博異志「李黄」 太平広記卷四五八所収

如...
其矢而射之既中不復再見頃經旬日與微滿山獵師乃
自山頂繩索下觀見一大蟒腐爛於巖間狗仙山之事亦
無有之出玉堂

李黄

元和二年隴西李黄鹽鉄使遜之猶子也因調選次乘暇

於長安東市者見一犢車侍婢數人於車中貨易李潛目
車中因見白衣之妹綽約有絕代之色李子求問侍者曰
娘子孀居袁氏之女前事李家今身依李之服方外除所
以市此耳又詢可能再從人乎乃笑曰不知李子乃出與
金帛貨諸錦繡婢輩遂傳言云且貸錢買之請隨到莊嚴
寺左側宅中相還不晚李子悅大已晚遂逐犢車而行礙
夜方至所止犢車入中門白衣妹一人下車侍者以帷擁
之而入李下馬俄見一使者將柵而出云且坐坐畢侍者
云今夜郎君豈服領錢乎不然此有主人否且歸主人明
晨不晚也李子曰適今無交錢之志然此亦無主人何見
隔之其也侍者入復出口若無主人此豈不可但勿以疎
漏為謂也俄而侍者六屈郎君李子整衣而入見青服老

唐代の蛇妖伝説 「李黄」

李黄はそこで一台の牛車と侍女数人が車の中から買い物をしているのを見かけた。車の中を覗くと白衣の美しい女性がいた。なまめかしい絶世の美女である。侍女に尋ねると、「奥様はいまはお一人の身、袁家のお嬢様でございます。以前、李家に嫁がれたのですが、旦那様を亡くされ、ようやく喪も明けたので、買い物にいらしたのです」と答えた。

(唐)博異志「李黄」 太平広記巻四五八所収

其矢而射之既中不復再見頃經旬日與微滿山獵師乃
自山頂窺窺下觀見一大蟒腐爛於巖間狗仙山之事亦
無有之出玉堂

李黄

元和二年隴西李黄鹽鐵使遜之猶子也因調選次乘暇

於長安東市者見一犢車侍婢數人於市中貨易李潛目
車中因見白衣之妹綽約有絕代之色李子求問侍者曰
娘子孀居袁氏之女前事李家今身依李之服方外除所
以市此耳又詢可能再從人乎乃笑曰不知李子乃出與
金帛貨諸錦繡婢輩遂傳言云且貸錢買之請隨到莊嚴
寺左側宅中相還不晚李子悅大已晚遂逐犢車而行礙
夜方至所止犢車入中門白衣妹一人下車侍者以帷擁
之而入李下馬俄見一使者將柵而出云且坐坐畢侍者
云今夜郎君豈服領錢乎不然此有主人否且歸主人明
晨不晚也李子曰適今無交錢之志然此亦無主人何見
隔之其也侍者入復出口若無主人此豈不可但勿以疎
漏為謂也俄而侍者六屈郎君李子整衣而入見青服老

唐代の蛇妖伝説 「李黄」

「再婚のご予定は」と訪ねると、侍女は笑って「存じません」と答えた。李黄が代金を払い、錦や刺繍を買うと、侍女が夫人の言葉を伝えた。「立て替えていただき恐縮です。どうか莊嚴寺の左にある屋敷までご同行ください。代金はお返します」李黄は喜び、日も暮れかかっていたので、そのまま牛車の後について行った。

(唐)博異志「李黄」 太平広記巻四五八所収

其矢而射之既中不復再見頃經旬日與微滿山獵師乃
自山頂窺窺下觀見一大蟒腐爛於巖間狗仙山之事亦
無有之出玉堂
李黄
元和二年隴西李黄鹽鐵使遜之猶子也因調選次乘暇

於長安東市者見一犢車侍婢數人於市中貨易李潛目
車中因見白衣之妹綽約有絕代之色李子求問侍者曰
娘子孀居袁氏之女前事李家今身依李之服方外除所
以市此耳又詢可能再從人乎乃笑曰不知李子乃出與
金帛貨諸錦繡婢輩遂傳言云且貸錢買之請隨到莊嚴
寺在御宅中相還不晚李子悅大已晚遂逐犢車而行礙
夜方至所止犢車入中門白衣妹一人下市侍者以帷擁
之而入李下馬俄見一使者將柵而出云且坐坐畢侍者
云今夜郎君豈服領錢乎不然此有主人否且歸主人明
晨不晚也李子曰適今無交錢之志然此亦無主人何見
隔之其也侍者入復出口若無主人此豈不可但勿以疎
漏為謂也俄而侍者六屈郎君李子整衣而入見青服老

唐代の蛇妖伝説 「李黄」

夜になってようやく屋敷に着いた。牛車が中門に入ると、白衣の夫人は車を降り、侍女に帳で取り囲まれながら奥に入っていた。

李黄が馬から下りると、一人の使いの者が長椅子を持って現れ、言った。
「どうぞおかけください」

(唐)博異志 「李黄」 太平広記卷四五八所収

其矢而射之既中不復再見頃經旬日與微滿山獵師乃
自山頂窺窺下觀見一大蟒腐爛於巖間狗仙山之事亦
無有之出玉堂

李黄

元和二年隴西李黄鹽鐵使遜之猶子也因調選次乘暇

於長安東市者見一犢車侍婢數人於市中貨易李潛目
車中因見白衣之妹綽約有絕代之色李子求問侍者曰
娘子孀居袁氏之女前事李家今身依李之服方外除所
以市此耳又詢可能再從人乎乃笑曰不知李子乃出與
金帛貨諸錦繡婢輩遂傳言云且貸錢買之請隨到莊嚴
寺左側宅中相還不晚李子悅大已晚遂逐犢車而行疑
夜方至所止犢車入中門白衣妹一人下市侍者以帷擁

之而入李下馬俄見一使者將柵而出云且坐坐畢侍者
云今夜郎君豈服領錢乎不然此有主人否且歸主人明
晨不晚也李子曰適今無交錢之志然此亦無主人何見
隔之其也侍者入復出口若無主人此豈不可但勿以疎
漏為請也俄而侍者六屈郎君李子整衣而入見青服老

唐代の蛇妖伝説 「李黄」

腰をおろすと、侍女が言った。

「今夜はお金のやり取りをしている暇はございませんでしょう。この辺りにお知りあいの方はいませんか。

そちらにお泊りになり、明朝、取りにいらしてください」

「お金はかまわないのですが、私はこのあたりに知りあいなどいません。どうか追い出さなくてください」

(唐)博異志「李黄」 太平広記巻四五八所収

其矢而射之既中不復再見頃經旬日與微滿山獵師乃
自山頂窺窺下觀見一大蟒腐爛於巖間狗仙山之事亦
無有之出玉堂

李黄

元和二年隴西李黄鹽鐵使遜之猶子也因調選次乘暇

於長安東市者見一犢車侍婢數人於市中貨易李潛目
車中因見白衣之妹綽約有絕代之色李子求問侍者曰
娘子孀居袁氏之女前事李家今身依李之服方外除所
以市此耳又詢可能再從人乎乃笑曰不知李子乃出與
金帛貨諸錦繡婢輩遂傳言云且貸錢買之請隨到莊嚴
寺左側宅中相還不晚李子悅大已晚遂逐犢車而行礙
夜方至所止犢車入中門白衣妹一人下車侍者以帷擁
之而入李下馬俄見一使者將柵而出云且坐坐畢侍者
云今夜郎君豈服領錢乎不然此有主人否且歸主人明
晨不晚也李子曰適今無交錢之志然此亦無主人何見
隔之其也侍者入復出口若無主人此豈不可但勿以疎
漏為請也俄而侍者六屈郎君李子整衣而入見青服老

唐代の蛇妖伝説 「李黄」

侍女は奥に入ると、また出てきて言った。

「お知り合いの方がいないなら、ここにお泊りいただいてもかまいません。ただ、もてなしが悪いと怒らな

いでくださいね」
しばらくすると侍女が、
「むさくるしいところですが」

と李黄を招いた。

(唐)博異志「李黄」 太平広記巻四五八所収

其矢而射之既中不復再見頃經旬日與微滿山獵師乃
自山頂窺窺下觀見一大蟒腐爛於巖間狗仙山之事亦
無有之出玉堂

李黄

元和二年隴西李黄鹽鐵使遜之猶子也因調選次乘暇

於長安東市者見一犢車侍婢數人於車中貨易李潛目
車中因見白衣之姝綽約有絕代之色李子求問侍者曰
娘子孀居袁氏之女前事李家今身依李之服方外除所
以市此耳又詢可能再從人乎乃笑曰不知李子乃出與
金帛貨諸錦繡婢輩遂傳言云且貨錢買之請隨到莊嚴
寺左側宅中相還不晚李子悅大已晚遂逐犢車而行礙
夜方至所止犢車入中門白衣姝一人下車侍者以帷擁
之而入李下馬俄見一使者將柵而出云且坐坐畢侍者
云今夜郎君豈服領錢乎不然此有主人否且歸主人明
晨不晚也李子曰適今無交錢之志然此亦無主人何見
隔之其也侍者入復出口若無主人此豈不可但勿以疎
漏為謂也俄而侍者六屈郎君李子整衣而入見青服老

唐代の蛇妖伝説 「李黄」

李黄が衣服を整えて奥に入ると、青い服を着た老婦人が庭に立っていた。挨拶すると、白衣の夫人の叔母だという。

庭に坐っていると、白衣の夫人が出てきた。白く輝くスカート、真っ白な肌、しとやかで気品があり、まるで仙女のようである。挨拶すると、また奥に入って行った。

(唐)博異志「李黄」 太平広記卷四五八所収

寺左側宅中相還不晚李于悦大已晚遂逐轎車而行礙夜方至所止轎車入中門白衣姝一人下車侍者以帷擁之而入李下馬俄見一使者將榻而出云且坐坐畢侍者云今夜郎君豈服領錢乎不然此有主人否且歸主人明晨不晚也李于曰迺今無交錢之志然此亦無主人何見隔之其也侍者入復出口若無主人此豈不可但勿以疎漏為請也俄而侍者六屈郎君李于整衣而入見青服老

太平廣記

卷四五八

蛇三

七

女郎立於庭相見曰白衣之娥也中庭坐少頃白衣方出

素裙粲然凝質皎若辭氣潤雅神仙不殊畧序欵曲翫然却入姨坐謝曰垂情與貨請彩色比日來市者皆不如之然所假如何深憂愧李于曰綵帛簾繆不足以奉佳人服飾何苦指價乎答曰渠淺輒不足侍君子巾櫛然貧居有三十千債負郎君儻不棄則願侍左右矣李于悦拜於侍側俯而圖之李于有貨易所先在近遂命所便取錢三千須臾而至堂西開門割然而開飯食畢備皆在西閭姨遂延李于入坐轉盼炫煥女郎旋至命坐拜姨而坐六七人具飯食畢命酒歡飲一佳三日飲樂無所不至第四日姨云李郎君且歸恐尙書怪遲後往來亦何難也李亦有歸志承命拜辭而出上馬僕人覺李于有腥臊氣異常遂歸

唐代の蛇妖伝説 「李黄」

叔母は坐って礼を述べた。

「おかげさまでいろいろと買うことができました。どれも先日買ったのより良いものばかり。お金はどうお返ししようかと思案しております」

李黄はいった。

「どれも大した物ではございません。ご夫人には不釣合いな物ばかり。お金など気になさらないでください」

太平広記卷四五八所収

寺左側宅中相還不晚李子悦大已晚遂逐轎車而行礙夜方至所止轎車入中門白衣姝一人下車侍者以帷擁之而入李下馬俄見一使者將榻而出云且坐坐畢侍者云今夜郎君豈服領錢乎不然此有主人否且歸主人明晨不晚也李子曰迺今無交錢之志然此亦無主人何見隔之其也侍者入復出口若無主人此豈不可但勿以疎漏為請也俄而侍者六屈郎君李子整衣而入見青服老

太平廣記 卷四五八 蛇三

女郎立於庭相見曰白衣之娥也中庭坐少頃白衣方出素裙粲然凝質皎若辭氣潤雅神仙不殊畧序欵曲譏然却入姨坐謝曰幸情與貨請彩色比日來市者皆不如之然所假如何深憂愧李子曰綵帛簾繆不足以奉佳人服飾何苦指價乎答曰渠淺輒不足侍君子巾櫛然貧居有三十千債負郎君儻不棄則願侍左右矣李子悅拜於侍側俯而圖之李子有貨易所先在近遂命所便取錢三千須臾而至堂西開門割然而開飯食畢備皆在西閤姨遂延李子入坐轉盼炫煥女郎旋至命坐拜姨而坐六七人具飯食畢命酒歡飲一佳三日飲樂無所不至第四日姨云李郎君且歸恐尙書怪遲後往來亦何難也李亦有歸志承命拜辭而出上馬僕人覺李子有腥臊氣異常遂歸

唐代の蛇妖伝説 「李黄」

叔母は答えて言った。

「あれはふつつかものですが、貧乏暮らしのため、三万銭の借金を抱えております。もしよろしければ、面倒を見てやっていただけませんか」

李黄は喜び、跪いて礼をし、夫人を身請けすることにした。近くに店を持っていたので使用人に銭三万を
取りに行かせ、まもなく金が届いた。

（唐）博異志 「李黄」 太平広記卷四五八所収

寺左側宅中相還不晚李于悦大已晚遂逐轎車而行礙
夜方至所止轎車入中門白衣姝一人下中侍者以帷擁
之而入李下馬俄見一使者將榻而出云且坐坐畢侍者
云今夜郎君豈服領錢乎不然此有主人否且歸主人明
晨不晚也李于曰迺今無交錢之志然此亦無主人何見
隔之其也侍者入復出口若無主人此豈不可但勿以疎
漏為請也俄而侍者六屈郎君李于整衣而入見青服老

太平廣記 卷四十五 蛇三

女郎立於庭相見曰白衣之娥也中庭坐少頃白衣方出
素裙粲然凝質皎若辭氣潤雅神仙不殊畧序欵曲翫然
却入姨坐謝曰垂情與貨請衫色比日來市者皆不如之
然所假如何深憂愧李于曰綵帛簾繆不足以奉佳人服
飾何苦指價乎答曰渠淺願不足侍君子巾櫛然貧居有

三十千債負郎君儻不棄則願侍左右矣李于悅拜於侍
側俯而圖之李于有貨易所先在近遂命所便取錢三千
須臾而至堂西開門割然而開飯食畢備皆在西閭姨遂
延李于入坐轉盼炫煥女郎旋至命坐拜姨而坐六七人
具飯食畢命酒歡飲一佳三日飲樂無所不至第四日姨
云李郎君且歸恐尙書怪遲後往來亦何難也李亦有歸
志承命拜辭而出上馬僕人覺李于有腥臊氣異常遂歸

唐代の蛇妖伝説 「李黄」

西の部屋の扉が開くと、室内には食事が並んでいた。叔母は李黄に席をすすめると、目で合図を送った。すると夫人が現れ、叔母に挨拶すると席に着いた。侍女たち六、七人が食事の用意を終えると、酒が勧められ、楽しく飲んだ。こうして泊まること三日。いたれりつくせりのもてなしが続いた。

金帛(唐)博異志「李黄」太平広記卷四五八所収

寺左側宅中相還不晚李于悦大已晚遂逐轎車而行礙夜方至所止轎車入中門白衣姝一人下車侍者以帷擁之而入李下馬俄見一使者將榻而出云且坐坐畢侍者云今夜郎君豈服領錢乎不然此有主人否且歸主人明晨不晚也李于曰迺今無交錢之志然此亦無主人何見隔之其也侍者入復出口若無主人此豈不可但勿以疎漏為請也俄而侍者六屈郎君李于整衣而入見青服老

太平廣記 卷四十八 蛇三

女郎立於庭相見曰白衣之娥也中庭坐少頃白衣方出素裙粲然凝質皎若辭氣潤雅神仙不殊畧序欵曲翫然却入姨坐謝曰垂情與貨請衫色比日來市者皆不如之然所假如何深憂愧李于曰綵帛簾繆不足以奉佳人服飾何苦指價乎答曰渠淺輒不足侍君子巾櫛然貧居有三十千債負郎君儻不棄則願侍左右矣李于悅拜於侍側俯而圖之李于有貨易所先在近遂命所便取錢三千須臾而至堂西開門割然而開飯食畢備皆在西閤姨遂延李于入坐轉盼煇煇女郎旋至命坐拜姨而坐六七人具飯食畢命酒歡飲一佳三日飲樂無所不至第四日姨云李郎君且歸恐尙書怪遲後往來亦何難也李亦有歸志承命拜辭而出上馬僕人覺李于有腥臊氣異常遂歸

唐代の蛇妖伝説 「李黄」

四日目になって叔母が言った。

「李様は、ひとまずご帰宅なさってはいかがでしよう。遅くなると、尚書様がお怒りになりますよ。またいつでもいらっしやれるのですから」
李黄もそろそろ家に帰ろうと考えていたので、暇乞いをして屋敷を後にした。

娘（唐）博異志「李黄」太平広記卷四五八所収

以市此耳又詢可能再從人乎乃笑曰不知李乃出與金帛貨諸錦繡婢輩遂傳言云且貸錢買之請隨到莊嚴寺左側宅中相還不晚李子悅大已晚遂逐轎車而行礙夜方至所止轎車入中門白衣姝一人下車侍者以帷擁之而入李下馬俄見一使者將榻而出云且坐坐畢侍者云今夜郎君豈服領錢乎不然此有主人否且歸主人明晨不晚也李子曰迺今無交錢之志然此亦無主人何見隔之其也侍者入復出口若無主人此豈不可但勿以疎漏為請也俄而侍者六屈郎君李子整衣而入見青服老

太平廣記

卷四五八

蛇三

七

女郎立於庭相見曰白衣之媵也中庭坐少頃白衣方出素裙粲然凝質皎若辭氣潤雅神仙不殊畧序欵曲飄然却入媵坐謝曰垂情與貨請衫色比日來市者皆不如之然所假如何深憂愧李子曰綵帛簾繆不足以奉佳人服飾何苦指價乎答曰渠淺輒不足侍君子巾櫛然貧居有三十千債負郎君儻不棄則願侍左右矣李子悅拜於侍側俯而圖之李子有貨易所先在近遂命所便取錢三千須臾而至堂西開門割然而開飯食畢備皆在西閭媵遂延李子入坐轉盼炫煥女郎旋至命坐拜媵而坐六七人具飯食畢命酒歡飲一佳三日飲樂無所不至第四日媵云李郎君且歸恐尙書怪遲後往來亦何難也李亦有歸志承命拜辭而出上馬僕人覺李子有腥臊氣異常遂歸

太平広記(黄氏槐蔭草堂 乾隆20 (1755)年刊)

国立国会図書館デジタルコレクションより

唐代の蛇妖伝説 「李黄」

李黄が馬に乗ると、下僕は何か異様な生臭いにおいを感じ、すぐに屋敷に帰った。

「何日間も姿が見えなかったが、どこにいつていたのか」と尋ねられると適当に答え、身体が重くめまいがするので、布団を用意させ寝ることにした。

(唐)博異志 「李黄」 太平広記卷四五八所収

三十千債負郎君信不棄則願侍左右矣李子悅拜於侍側俯而圖之李子有貨易所先在近遂命所使取錢三千須臾而至堂西開門割然而問飯食畢備皆在西開婢遂延李子入坐轉盼炫煥女郎旋至命坐拜姨而坐六七日具飯食畢命酒歡飲一佳三日飲樂無所不至第四日婢云李郎君且歸恐尙書怪遲後往來亦何難也李亦有歸志承命拜辭而出上馬僕人覺李子有腥臊氣異常遂歸

宅問何處許日不見以他語對遂覺身重頭旋命僕而寢先是婚鄭氏女在側云足下調官已成昨日過官寬公不得其二兄替過官已了李答以媿佩之辭俄而鄭兄至直以所往行李已漸覺恍惚祇對失次謂妻曰吾不起矣口雖語但覺被底身漸消盡揭被而視空注水而已惟有頭存家大驚慄呼從出之僕考之具言其事及去其舊宅所乃空圍有一皂莢樹樹上有十五千樹下有十五千餘子無所見問彼處人云往往有巨白蛇在樹下便無別物姓袁者蒸以空圍爲姓耳

復說元和中鳳翔節度李聽從子常任金吾參軍白水寧里出遊及安化門外乃連一車子通以銀裝頗極鮮麗駕以白牛從一女奴皆乘白馬衣服皆素而姿容嫵媚

唐代の蛇妖伝説 「李黄」

李黄は鄭家の娘と結婚していた。
その妻が傍らでいった。

「あなたの任官が決まりましたよ。
昨日、吏部に行って手続きをするはずでしたが、どこを探しても見つからないので、二番目の兄が代わりに済ませてきました」

李黄は迷惑をかけたことを詫びた。

(唐)博異志 「李黄」 太平広記卷四五八所収

三十千債負郎君信不棄則願侍左右矣李子悅拜於侍側俯而圖之李子有貨易所先在近遂命所使取錢三千須臾而至堂西開門割然而開飯食畢備皆在西開姨遂延李子入坐轉盼炫煥女郎旋至命坐拜姨而坐六七人具飯食畢命酒歡飲一佳三日飲樂無所不至第四日姨云李郎君且歸恐尙書怪遲後往來亦何難也李亦有歸志承命拜辭而出上馬僕人勣李子有腥臊氣異常遂歸

宅問何處許日不見以他語對遂覺身重頭旋命僕而寢先是婚鄭氏女在側云足下調官已成昨日過官寬公不得其二兄替過官已了李答以媿佩之辭俄而鄭兄至責以所往行李已漸覺恍惚祇對失次謂妻曰吾不起矣口雖語但覺被底身漸消盡揭被而視空注水而已惟有頭存家大驚慄呼從出之僕考之具言其事及去其舊宅所乃空圍有一皂莢樹樹上有十五千樹下有十五千餘子無所見問彼處人云往往有巨白蛇在樹下便無別物姓袁者蒸以空圍爲姓耳

復說元和中鳳翔節度李聽從子官任金吾參軍白水寧里出遊及安化門外乃連一車子通以銀裝頗極鮮麗駕以白牛從一女奴皆乘白馬衣服皆素而姿容嫵媚

唐代の蛇妖伝説 「李黄」

まもなく妻の兄も来て、いったいどこへ行っていたのかと小言を言った。ところが李黄は意識が朦朧として、まともな受け答えができなくなっていた。そして妻に向かっていった。

「私はもう駄目だ」

〔唐〕博異志 「李黄」 太平広記卷四五八所収

餽何者指饋李君不棄則願侍左右矣李子悅拜於侍
三十千債負郎君信不棄則願侍左右矣李子悅拜於侍
側俯而圖之李子有貨易所先在近遂命所便取錢三千
須臾而至堂西開門割然而問飯食畢備皆在西間婢遂
延李子入坐轉盼炫煥女郎旋至命坐拜姨而坐六七八
具飯食畢命酒歡飲一佳三日飲樂無所不至第四日婢
云李郎君且歸恐尙書怪遲後往來亦何難也李亦有歸
志承命拜辭而出上馬僕人勸李子有腥臊氣異常遂歸

宅問何處許日不見以他語對遂覺身重頭旋命僕而寢
先是婚鄭氏女在側云足下調官已成昨日過官寬公不
得其二兄替過官已了李答以媿佩之辭俄而鄭兄至直
以所往行李已漸覺恍惚祇對失次謂妻曰吾不起矣口
雖語但覺被底身漸消盡揭被而視空注水而已惟有頭
存家大驚慄呼從出之僕考之具言其事及去其舊宅所
乃空圍有一皂莢樹樹上有十五千樹下有十五千餘子
無所見問彼處人云往往有巨白蛇在樹下便無別物姓
袁者蒸以空圍爲姓耳

復說元和中鳳翔節度李聽從子常任金吾參軍白水
寧里出遊及安化門外乃連一車子通以銀裝頗極鮮麗
駕以白牛從一女奴皆乘白馬衣服皆素而姿容嫵媚

唐代の蛇妖伝説 「李黄」

口はきけるのだが、布団の中の体はしだいに溶けていくようだった。布団をめくってみると、水溜りの中に頭があるだけだった。

驚いた家の者が下僕を呼んで問い質すと、下僕は事の仔細を話した。

(唐)博異志「李黄」太平広記卷四五八所収

餽何者指饋于各日其後頗不足侍者于市櫛然貧居有三十千債負郎君儻不棄則願侍左右矣李于悅拜於侍側俯而圖之李于有貨易所先在近遂命所使取錢三千須臾而至堂西開門割然而問飯食畢備皆在西開婢遂延李于入坐轉盼炫煥女郎旋至命坐拜姨而坐六七日具飯食畢命酒歡飲一佳三日飲樂無所不至第四日婢云李郎君且歸恐尙書怪遲後往來亦何難也李亦有歸志承命拜辭而出上馬僕人覩李于有腥臊氣異常遂歸

宅問何處許日不見以他語對遂覺身重頭旋命僕而寢先是婚鄭氏女在側云足下調官已成昨日過官寬公不得其二兄替過官已了李答以媿佩之辭俄而鄭兄至直以所往行李已漸覺恍惚祇對失次謂妻曰吾不起矣口雖語但覺被底身漸消盡揭被而視空注水而已惟有頭存家大驚懼呼從出之僕考之具言其事及去其舊宅所乃空圍有一皂莢樹樹上有十五千樹下有十五千餘子無所見問彼處人云往往有巨白蛇在樹下便無別物姓袁者蒸以空圍爲姓耳

復說元和中鳳翔節度李聽從子常任金吾參軍白水寧里出遊及安化門外乃連一車子通以銀裝頗極鮮麗駕以白牛從一女奴皆乘白馬衣服皆素而姿容嫵媚瑯

唐代の蛇妖伝説 「李黄」

先日、の屋敷を訪ねると、そこは廢墟であつた。サイカチの木が一本あり、その上に錢一万五千、その下にも錢一万五千。その他は何も見当たらない。地元の人に尋ねると、よく大きな白蛇が木の下でとぐるを巻いていたが、他には何もないという。袁と名乗つたのは、恐らくこの空き地の園を姓としたのであろう。

〔唐〕博異志「李黄」 太平広記卷四五八所収

三十千債負郎君信不棄則願侍左右矣李子悅并於侍側俯而圖之李子有貨易所先在近遂命所便取錢三千須臾而至堂西開門割然而問飯食畢備皆在西開婢遂延李子入坐轉盼炫煥女郎旋至命坐拜姨而坐六七日具飯食畢命酒歡飲一佳三日飲樂無所不至第四日婢云李郎君且歸恐尙書怪遲後往來亦何難也李亦有歸志承命拜辭而出上馬僕人勸李子有腥臊氣異常遂歸

宅問何處許日不見以他語對遂覺身重頭旋命僕而寢先是婚鄭氏女在側云足下調官已成昨日過官寬公不得其二兄替過官已了李答以媿佩之辭俄而鄭兄至責以所往行李已漸覺恍惚祇對失次謂妻曰吾不起矣口雖語但覺被底身漸消盡揭被而視空注水而已惟有頭存家大驚慄呼從出之僕考之具言其事及去其舊宅所乃空圍有一皂莢樹樹上有十五千樹下有十五千餘子無所見問彼處人云往往有巨白蛇在樹下便無別物姓袁者蓋以空圍爲姓耳

復說元和中鳳翔節度李聽從子官任金吾參軍白水寧里出遊及安化門外乃連一車子通以銀裝頗極鮮麗駕以白牛從一女奴皆乘白馬衣服皆素而姿容嫵媚



こうした蛇妖伝説は、
日本にもあるのか？

日本の蛇妖伝説——道成寺伝説

〔解説〕

日本にも仏教の不邪淫戒に基づく蛇妖伝説がある。和歌山県の道成寺にまつわる伝説である。

その起源は古く、平安時代半ばの長久年間（一〇四〇～四四年）に比叡山の僧・鎮源が撰した『大日本国法華経験記』（卷下一二九紀伊国牟婁郡悪女）に記録が見られる。

大日本国法華経験記卷上

首楞嚴院沙門鎮源 撰

第一傳燈佛法聖德太子

聖德太子、豊明天皇第一子也。母妃皇女夢有金色僧語云、吾有救世願宿。后妃腹妃問為何僧云、我救世菩薩家、有西方妃答云、我腹垢穢何宿居矣。僧曰、吾不厭垢穢望感人間。躍入口中。妃即覺後喉中猶吞物。自此以後始知有娠。漸及八月胎中而言聲。聞于外。出胎之時忽有赤黃色光。至自西方照曜殿内。生而能言。知人動靜。從百濟國始獻經論。太子奏曰、

日本の蛇妖伝説——道成寺縁起

和歌山県の道成寺には、室町時代に描かれた『道成寺縁起絵巻』(二二卷)という絵巻物が伝わっている。

若く美しい僧に思いを寄せ、裏切られた女性が、その情欲と怨念から、恐ろしい蛇身に姿を変え、僧を追いかけて焼き殺すという物語である。

いのおのまもけかゝりくろやち
つりし女の方へせよ

欲知過去因 見其現在果

欲知未来果 見其現在因



道成寺縁起絵巻(和歌山県道成寺蔵)

A topographic map of Japan, showing the four main islands: Hokkaido, Honshu, Shikoku, and Kyushu. The map uses a color gradient from green to brown to represent elevation. A dark green rectangular callout box is positioned over the central part of Honshu, with a thin black line extending from its bottom center to a small black dot on the southern coast of Honshu, indicating the location of Dosei-ji temple.

道成寺

和歌山県日高郡日高川町鐘巻

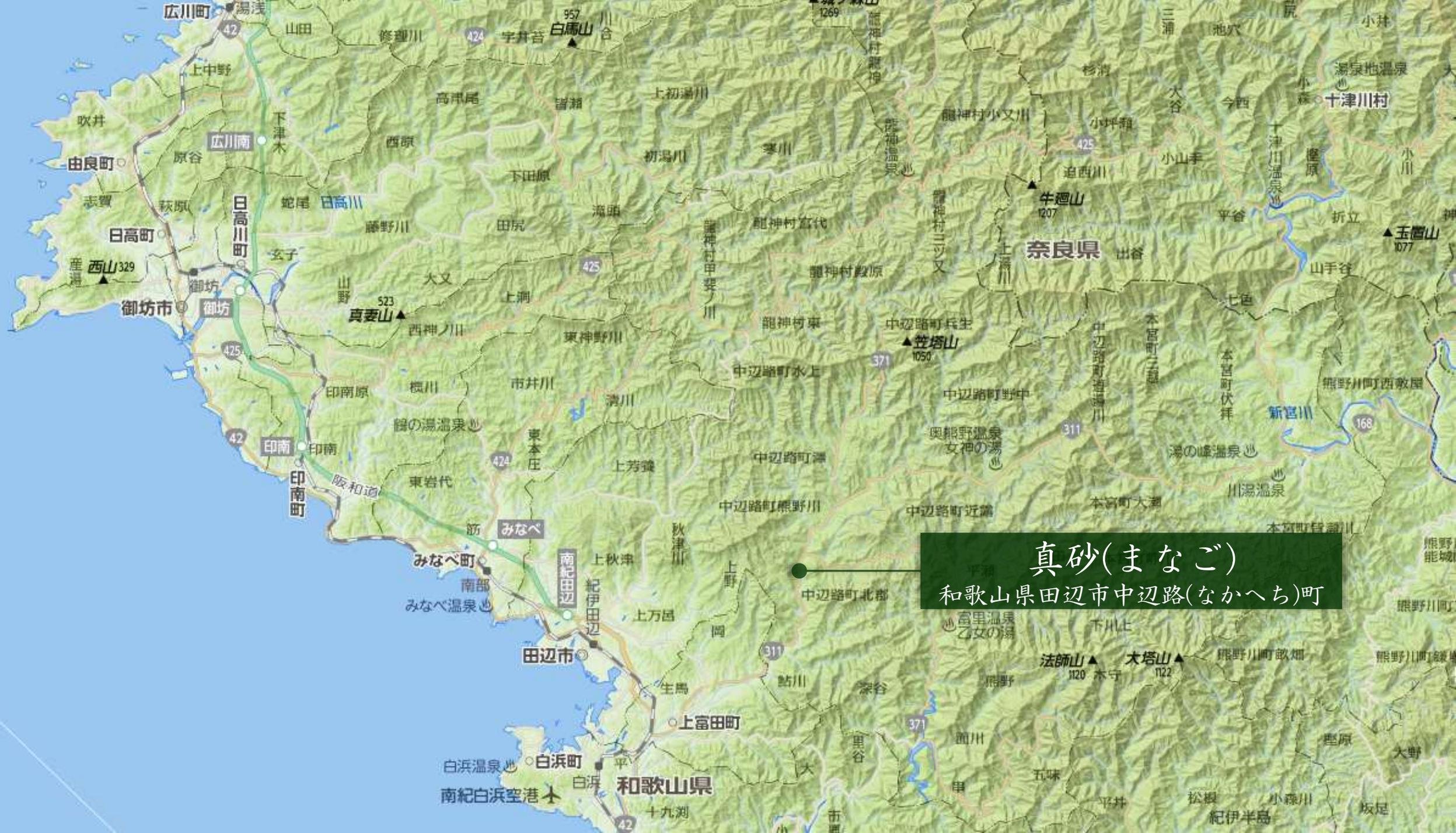


道成寺(和歌山県日高郡日高川町鐘巻)

A topographic map of Japan, showing the four main islands: Hokkaido, Honshu, Shikoku, and Kyushu. The map uses a color gradient from green to brown to represent elevation. A dark green rectangular callout box is positioned over the central part of Honshu, with a thin black line extending from its bottom center to a small white square on the map, which contains a black dot indicating the location of Dojinguji Temple.

道成寺

和歌山県日高郡日高川町鐘巻



真砂(まなご)
和歌山県田辺市中辺路(なかへち)町



熊野古道の捻木(ねじき)峠から見た田辺湾

日本の蛇妖伝説

『道成寺縁起絵巻』巻の上

その夜、若く美しい僧に情欲を燃やした庄司の妻は、僧のもとを訪ね「我が家にはこれまで人を泊めたこととはございません。これも前世からのご縁でしょう」と関係を迫る。



日本の蛇妖伝説

『道成寺縁起絵巻』巻の上

僧は「熊野山を目の前にして戒を破ることはできません。帰りに必ず寄りますから」と約束し、庄司の妻の家を後にする。



日本の蛇妖伝説

『道成寺縁起絵巻』巻の上

ところが僧はいつまで待っても
帰って来ない。待ちあぐねた庄司の
妻は、道行く人に尋ねる。

私のお坊様がかげごを背
負って逃げてしまいました。



若いお坊様と高齢のお坊様
のつれですが、どのくらい
先に行きましたか。



七八町
十二三町

日本の蛇妖伝説

『道成寺縁起絵巻』巻の上

すると通行人の一人が答えていう。

そういった人たちなら、
七、八町も先に行かれた
でしょう。

七、八町どころではあり
ませんよ。十二、三町は
先に行かれたでしょう。



あゝ一先達者も四房よし
新子男り！は師
おきこ平箱の
取てゆく
着の信りし
老信也
つれてゆく
のいぬ心

日本の蛇妖伝説

『道成寺縁起絵巻』巻の上

騙されたことに気づいた庄司の妻は、形相を変え、草履も脱ぎ捨てて僧の後を追う。庄司の妻の鬼気迫る姿に、通行人たちも驚きの声を上げる。

ああくやしい。
意地でもあの法師をつかまえなければ気がすまない。
もう恥もなにもない、草履などどうにでもなれ。



本当に恐ろしい表情です
ね。

あの女性の表情を
ご覧ください。



高しき水鏡
人

わふくは情やいぢ
けはゆりやね
張のいほ
あはた
ゆはた
終程ふ何
恥もあに
あはた
あはた
あはた
あはた

高しき水鏡

日本の蛇妖伝説

『道成寺縁起絵巻』巻の上

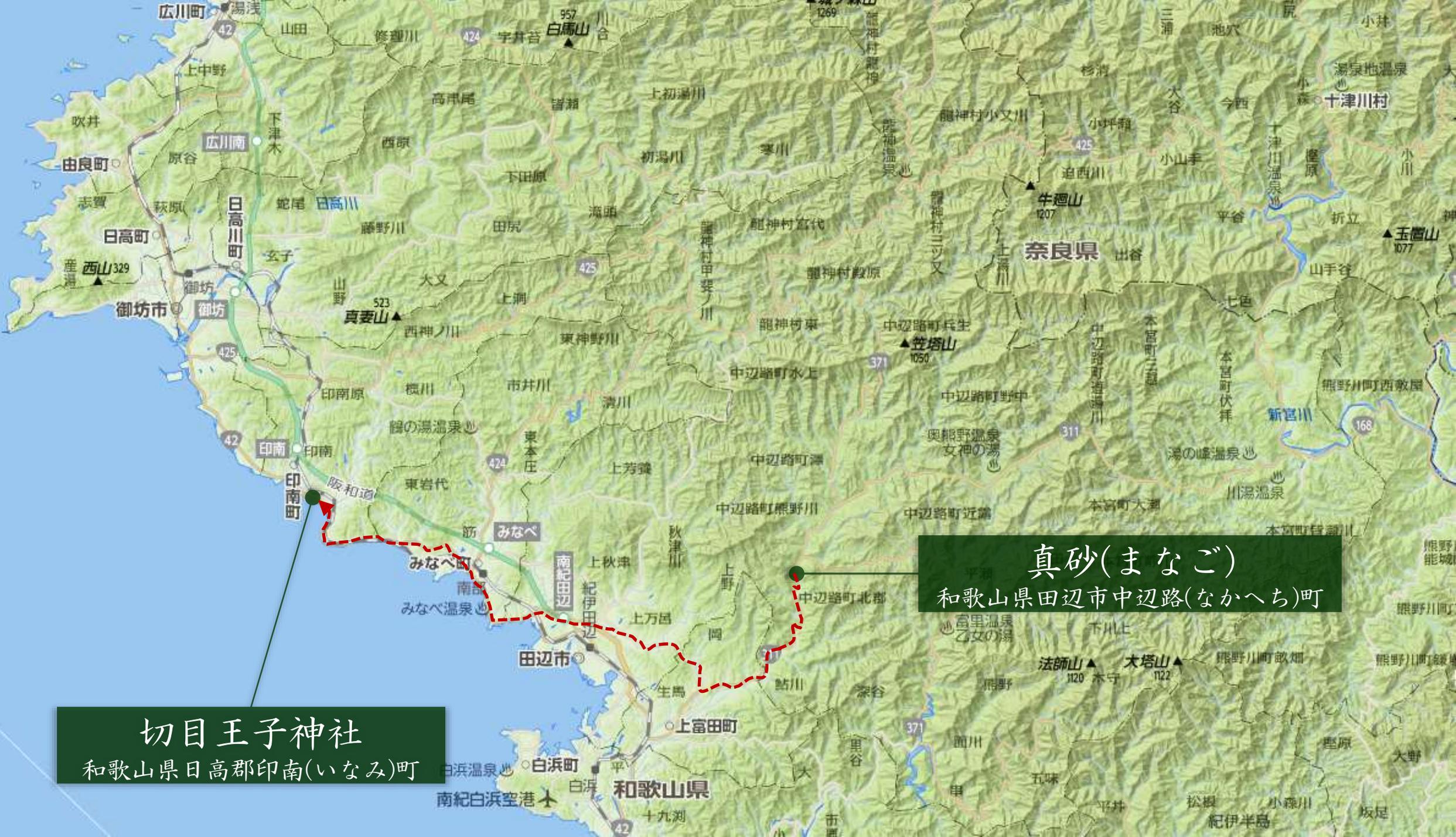
庄司の妻は僧を追って切目王子神社の前を駆け抜けていく。



五子
五子



現在の切目王子神社(和歌山県日高郡印南(いなみ)町)



真砂(まなご)
和歌山県田辺市中辺路(なかへち)町

切目王子神社
和歌山県日高郡印南(いなみ)町

日本の蛇妖伝説

上野で、庄司の妻はようやくやく僧に追いつく。

『道成寺縁起絵巻』巻の上

お坊様にお話
があります。
お会いしたこ
とがあると思
います。どう
か足をお止め
ください。

お会いし
た覚えは
ありません。
人違
いです。



あつたお坊にいぬ下



河も
らん

清姫の腰掛石・草履塚
和歌山県御坊市名田町

真砂(まなご)
和歌山県田辺市中辺路(なかへち)町

切目王子神社
和歌山県日高郡印南(いなみ)町





清姫の腰掛け石

清姫の腰掛け石(和歌山県御坊市名田町楠井)



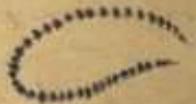
清姫草履塚(和歌山県御坊市名田町野島)

日本の蛇妖伝説

『道成寺縁起絵巻』巻の上

執念に燃える庄司の妻は、しだいにおぞましい姿へと変っていく。「ああ、恨めしい。お前というやつは。どこまでも追ってやる。けっして逃しはしないぞ」

ゆい



南無金剛童子助(女)河(あふ)河

どこへ
行く。
逃がす
ものか。



南無金剛童子助の物語

人形浄瑠璃 「日高川入相花王」

道成寺の蛇妖伝説は、日本の伝統芸能の世界では、安珍・清姫の物語として知られる。

人形浄瑠璃の「日高川入相花王（ひだかがわいりあいぎくら）」（宝暦九年（一七五九）大阪竹本座で初演）は、その代表的な作品。



人形浄瑠璃の「日高川入相花王」
では、僧に裏切られた女がおぞまし
い姿に変わるようすを独自の技法で
表現している。

どのような技法が使われているの
か？





文楽人形「ガブ」(Living Treasures of Japan - National Geographic Society 1981)

人形浄瑠璃の表現技法

人形浄瑠璃の「日高川入相花王」では、江戸時代に発達したからくりの技術を応用して、人形の口を横一文字に裂き（がぶ）、目をむき、角を生やすことで、僧に裏切られた女がおどましい姿に変わるようすを表現している。

人形浄瑠璃のがぶ

日本の蛇妖伝説

『道成寺縁起絵巻』巻の上

日高川まで来ると、川は増水して渡ることができない。僧は渡し舟に乗ってようやく川を渡った。後に残された庄司の妻は衣を脱ぎ捨て、蛇に姿を変えて川を渡る。





清姫の腰掛石・草履塚
和歌山県御坊市名田町

真砂(まなご)
和歌山県田辺市中辺路(なかへち)町

切目王子神社
和歌山県日高郡印南(いなみ)町





阿波人形浄瑠璃「日高川入相花王」

道成寺

和歌山県日高郡川辺町鐘巻

清姫の腰掛石・草履塚

和歌山県御坊市名田町

真砂(まなご)

和歌山県田辺市中辺路(なかへち)町

切目王子神社

和歌山県日高郡印南(いなみ)町



日本の蛇妖伝説

『道成寺縁起絵巻』巻の上

道成寺は（大宝元年（七〇一））文武天皇の勅願により紀道成が建立したもので、わが国で最初に千手観音菩薩をお祀りした霊場である。





道成寺(和歌山県日高郡日高川町鐘巻)

日本の蛇妖伝説

『道成寺縁起絵巻』巻の上

道成寺に逃げ込んだ僧は、寺の僧侶たちに仔細を告げ、助けを求めた。



わ唐いしうも
お船とねては
いしうもあ
あしうもあ

そのまに
いそれ毒にさげ様
あしうもあ

いしうもあ

なぜお止めになるのですか。
本当にあったことなのです。
嘘ではございません。

ほおっておけ。おおげ
さなことをいいおって。

唐国はいざ
しらず、わ
が国では未
曾有の出来
事。驚く限
りじゃ。

森で死んだ女た
ちは、死後、鬼
になると聞いて
おります。



日本の蛇妖伝説

『道成寺縁起絵巻』巻の上

僧侶たちは、この若い僧を蛇妖から守るため、寺の鐘を降ろしてその中に隠した。





稀代の不思議
な出来事じゃ。

えいえい

ああ

きりぎりす
とけの
ゆい

わんげら
すん

日本の蛇妖伝説

『道成寺縁起絵巻』巻の下

大蛇に姿を変えた庄司の妻は、僧の後を追って道成寺に入り、寺中を探し回った。



日本の蛇妖伝説

『道成寺縁起絵巻』巻の下

やがて僧が鐘の中に隠れていることを知った庄司の妻は、情念の炎で鐘を燃やした。

そして眼から血の涙を流し、もと来た道を帰っていった。



日本の蛇妖伝説

『道成寺縁起絵巻』巻の下

道成寺の僧侶たちが鐘に水をかけ、中を見ると、僧は炭のように真っ黒に焼けて、目も当てられぬ姿となっていた。





安珍塚 (和歌山県日高郡日高川町鐘巻道成寺)

道成寺

和歌山県日高郡川辺町鐘巻

清姫の腰掛石・草履塚

和歌山県御坊市名田町

真砂(まなご)

和歌山県田辺市中辺路(なかへち)町

切目王子神社

和歌山県日高郡印南(いなみ)町





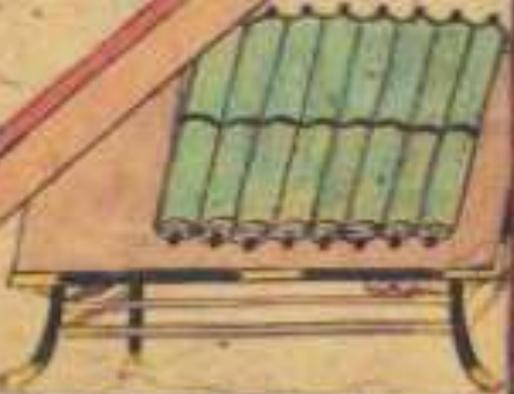
清姫の墓(和歌山県田辺市中辺路(なかへち)町真砂(まなご))

日本の蛇妖伝説

『道成寺縁起絵巻』巻の下

しばらくして、ある僧侶の夢に二匹の蛇が現れていった。

「私は鐘の中で焼け死んだ僧です。修行が足りなかったため、このような報いを受けましたが、どうか法華経を写経をして、私たちの菩提を吊ってください」



日本の蛇妖伝説

『道成寺縁起絵巻』巻の下

それを聞いた僧侶たちは、二人の
ために法華経を写経し、念仏をあげ
て菩提を弔った。



日本の蛇妖伝説

『道成寺縁起絵巻』巻の下

それを聞いた僧侶たちは、二人の
ために法華経を写経し、念仏をあげ
て菩提を弔った。

一切恭敬



日本の蛇妖伝説

『道成寺縁起絵巻』巻の下

すると僧の夢枕に浄衣を着た二人の天人が現れていった。
「おかげさまで法華経の功德により、蛇道を離れて、天人に生まれ変わる事ができました。」
やがて二人はそれぞれ別れて、天に昇っていった。





白蛇伝の謎

一、なぜ蛇と人間の恋愛なのか？

東アジアの世界宗教となった仏教では、五戒の一つとして邪淫を戒めていた。

仏教では、蛇は人間の邪淫を象徴すると考えられていたため、その破戒の恐ろしさを伝える「蛇妖伝説」が作られた。



白蛇伝の謎

- 一、なぜ蛇と人間の恋愛なのか？
- 二、なぜ蛇に同情するのか？
- 三、この話は、人々に何を伝えようとしてしているか？

1600BC
1500BC
1400BC
1300BC
1200BC
1100BC
1000BC
900BC
800BC
700BC
600BC
500BC
400BC
300BC
200BC
100BC
0
100
200
300
400
500
600
700
800
900
1000
1100
1200
1300
1400
1500
1600
1700
1800
1900
2000

殷 1600BC頃-1046BC

周 1046BC-771BC

春秋戦国時代 770BC-221BC

秦 221BC-207BC

漢 206BC-220AD

魏 220-265 蜀 221-263 呉 222-280

晋 265-316

五胡十六国時代 東晋 317-420

北朝 439-589 南朝 420-589

隋 581-619

唐 618-907

五代十国 907-960

遼 北宋 960-1127

金 1115-1234 南宋 1127-1279

元 1271-1368

明 1368-1644

清 1616-1912

中華民国 1912-1949

中華人民共和国 1949-



白蛇故事の原話

「蛇妖伝説」は、明代になると杭州の雷峰塔にまつわる新たな伝承へと生まれ変わる。「白娘子永鎮雷峰塔」である。

(唐)「李黄」(『博異志』)

(明)「白娘子永鎮雷峰塔」

白蛇故事の原話

〔解説〕

「白娘子永鎮雷峰塔」は明の天啓四年（一六二四）に馮夢竜が出版した白話小説集『警世通言』の中の一編。

『警世通言』は宋・元代の講釈

を筆録した話本と、話本の形式を模して創作された擬話本の計四〇作品を収める。『喻世明言』（古今小説）、

『醒世恒言』と併せて「三言」と呼ばれる。

桃樹下掘起浮土見一龜板約有三寸之長猶帶血肉魏公取歸煎膏入酒與魏生笑一日三服比及膏完病已全愈於是父子往華光廟祭賽與神道換袍又往純陽菴燒香後魏字果中科甲有詩爲證

真妄由來本自心

神仙豈肯蹈邪淫

人心不被邪淫惑

眼底逢來便可尋

第二十七卷

第二十八卷

白娘子永鎮雷峰塔

山外青山樓外樓

西湖歌舞幾時休

暖風薰得遊人醉

直把杭州作汴州

話説西湖景致山水鮮明晉朝咸和年間山水大發洶湧流入西門忽然水內有牛一頭見渾身金色後水退其牛隨行至北山不知去向開動杭州市上之人皆以爲顯化所以建立一寺名曰金牛寺西門即今之湧金門立一座廟號金華將軍當時有一番節法名渾書羅到此武林郡雲遊觀其山景道靈鷲山

(明)馮夢竜編『警世通言』

白蛇故事の原話

白娘子永鎮雷峰塔 警世通言 卷二八

【梗概】

宋の紹興年間、杭州の薬局に勤める許宣は、清明節の墓参りの帰り、雨の西湖で青青という召使をつれた美しい未亡人・白娘子に出会う。

傘がとりもつ縁で、許宣は白娘子と結ばれるが、白娘子が婚礼のため用意した銀が、邵太尉の蔵から盗まれたものとわかり、許宣は捕えられて蘇州に流刑となる。



白蛇故事の原話

白娘子永鎮雷峰塔 警世通言 卷二八

【梗概】

流刑先の蘇州で、許宣は白娘子と再会し結婚する。

承天寺の縁日の日、白娘子が用意した衣裳がまたもや周将仕の質庫から盗まれたものとわかり、許宣は捕らえられて鎮江に流刑となる。

網親公鸞異就神帳中看神道袍袖果然裂開往後
因碧桃樹下掘起浮土見一龜板約有三寸之長猶
帶血肉魏公取歸煎膏入酒與魏生笑一日三服比
及膏完病已全愈於是父子往華光廟祭賽與神道
換袍又往純陽菴燒香後魏宇果中科甲有詩為證

真妄由來本自心

神仙豈肯蹈邪淫

人心不被邪淫惑

眼底逢來便可尋

第二十七卷

第二十八卷

白娘子永鎮雷峰塔

山外青山樓外樓

西湖歌舞幾時休

暖風薰得遊人醉

直把杭州作汴州

話說西湖景致山水鮮明晉朝咸和年間山水大發
洶湧流入西門忽然水內有牛一頭見渾身金色後
水退其牛隨行至北山不知去向開動杭州市上之
人皆以為顯化所以建立一寺名曰金牛寺西門即
今之湧金門立一座廟號金華將軍當時有一番臨
法名渾壽羅到此武林郡雲遊說其山景道靈鷲山

白蛇伝の原話

白娘子永鎮雷峰塔 警世通言 卷二八

【梗概】

鎮江で許宣は再び白娘子とともに暮らし始める。

しかし、そこに金山寺の僧侶・法海禪師が現れ、本性を見破られた白娘子は江中に飛び込み、姿を消す。

細魏公驚異就神帳中看神道袍袖果然裂開往後
因碧桃樹下掘起浮土見一龜板約有三寸之長猶
帶血肉魏公取歸煎膏入酒與魏生喫一日三服比
及膏完病已全愈於是父子往華光廟祭賽與神道
換袍又往純陽菴燒香後魏字果中科甲有詩為證

真妄由來本自心

神仙豈肯蹈邪淫

人心不被邪淫惑

眼底逢來便可尋

第二十七卷

第二十八卷

白娘子永鎮雷峰塔

山外青山樓外樓

西湖歌舞幾時休

暖風薰得遊人醉

直把杭州作汴州

話說西湖景致山水鮮明晉朝咸和年間山水大發
洶湧流入西門忽然水內有牛一頭見渾身金色後
水退其牛隨行至北山不知去向聞動杭州市上之
人皆以為顯化所以建立一寺名曰金牛寺西門即
今之湧金門立一座廟號金華將軍當時有一番靈
法名渾壽羅到此武林郡雲遊觀其山景道靈鷲山



金山寺(江蘇省鎮江市)

白蛇伝の原話

白娘子永鎮雷峰塔 警世通言 卷二八

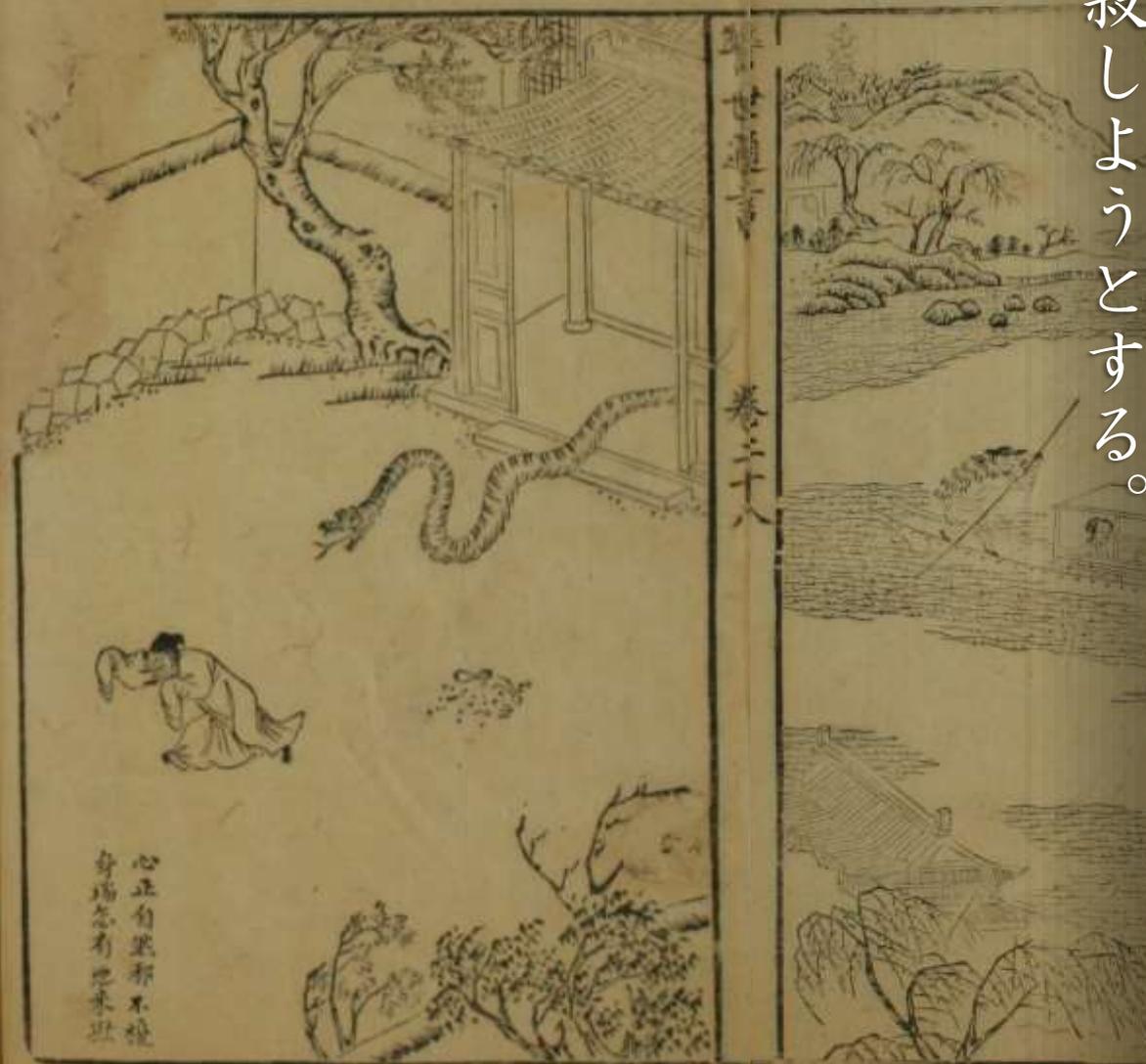
【梗概】

許宣は孝宗即位の恩赦により、杭州の姉の家に帰る。

そこにはまた白娘子が待っていた。

「私のいうとおりにすれば、楽しく暮らさせてあげるわ。でも、もし私を裏切るようなことがあったら、洪水を起こして町じゅうの人を溺れさせ、皆殺しにしてやるから」

許宣は、妖怪の本性を現わした白娘子に恐れをなし、湖に身を投げて自殺しようとする。



白蛇伝の原話

白娘子永鎮雷峰塔(警世通言卷二八)

【梗概】

そこに再び法海禪師が現われ、許宣に白娘子を捕らえるための鉢盂を授ける。

許宣が白娘子と青青を鉢盂で捕らえると、法海禪師はその鉢盂を雷峰寺の前に埋め、七層の塔を建てて、

「西湖の水乾き、江湖起こらず、雷峰塔倒れなば、白蛇世に出でん」という偈と、色欲を戒める詩を作る。

及膏完病已全愈於是父子往華光廟祭賽與神道
換袍又往純陽菴燒香後魏宇果中科甲有詩爲證

真妄由來本自心

神仙豈肯蹈邪淫

人心不被邪淫惑

眼底逢來便可尋

第二十七卷

第二十八卷

白娘子永鎮雷峰塔

山外青山樓外樓

西湖歌舞幾時休

暖風薰得遊人醉

直把杭州作汴州

話說西湖景致山水鮮明晉朝咸和年間山水大發
洶湧流入西門忽然水內有牛一頭見渾身金色後
水退其牛隨行至北山不知去向則動杭州市上之
人皆以爲顯化所以建立一寺名曰金牛寺西門即
今之湧金門立一座廟號金華將軍當時有一番醮
法名渾壽羅到此武林郡雲遊說其山景道靈鷲山

白蛇伝の原話

白娘子永鎮雷峰塔警世通言卷二八

【梗概】

世の人に勧む 色を愛すなかれ
色を愛す者は 色に迷わされん
心正しくば

自然と邪も擾くことなく
身端しくば

怎で悪の来りて欺くことあらん
ただ看よ許宣の色を愛すによりて
官司を帯累り是非を惹き起すを
老僧の来たりて救護せざれば

白蛇に吞まれて
些かも留めることなし

許宣は雷峰寺で出家し、数年の修行の後、この世を去った。

第二十七卷

第二十八卷

白娘子永鎮雷峰塔

山外青山樓外樓 西湖歌舞幾時休
暖風薰得遊人醉 直把杭州作汴州

話説西湖景致山水鮮明晉朝咸和年間山水大發
洶湧流入西門忽然水内有牛一頭見渾身金色後
水退其牛隨行至北山不知去向開動杭州市上之
人皆以為顯化所以建立一寺名曰金牛寺西門即
今之湧金門立一座廟號金華將軍當時有一番臨
法名渾壽羅到此武林郡雲遊說其山景道靈鷲山

1600BC
1500BC
1400BC
1300BC
1200BC
1100BC
1000BC
900BC
800BC
700BC
600BC
500BC
400BC
300BC
200BC
100BC
0
100
200
300
400
500
600
700
800
900
1000
1100
1200
1300
1400
1500
1600
1700
1800
1900
2000

殷 1600BC頃-1046BC		
周 1046BC-771BC		
春秋戦国時代 770BC-221BC		
秦 221BC-207BC		
漢 206BC-220AD		
魏 220-265	蜀 221-263	呉 222-280
晋 265-316		
五胡十六国時代		東晋 317-420
北朝 439-589		南朝 420-589
隋 581-619		
唐 618-907		
五代十国 907-960		
遼	北宋 960-1127	
金 1115-1234	南宋 1127-1279	
元 1271-1368		
明 1368-1644		
清 1616-1912		
中華民国 1912-1949		
中華人民共和国 1949-		



(唐)「李黄」(『博異志』)

(明)「白娘子永鎮雷峰塔」

(清)黄因琏「雷峰塔传奇」

小説から演劇へ
 〔解説〕
 清代になると、小説「白娘子永鎮雷峰塔」は演劇化され、各地で上演された。

小説から戯曲へ

〔解説〕

清代の劇作家・黄凶^{アツ}(一六九九
〜一七五二)は、小説「白娘子永鎮
雷峰塔」をもとに、戯曲「雷峰塔伝
奇」(『看山閣樂府』所収。乾隆三
年(一七三八)の自序あり)を創作した。
この戯曲について、彼は次のよう
に記している。

看山閣樂府

雷峰塔上卷

慈音

峰泖蕉窗居士填詞

菩薩鬘禽聲如語花如笑試吹鐵笛翻新調何必
認為真漁人莫問津 愛聽閒說鬼癖與坡仙比
勿謂妄言之多因情太癡

慶清朝慢末扮韋馱上再世菩提自成妖孽原來
宿有根源同泛湖山烟水巧合機緣自此兩相心
許贈金陡起顛連竄牢城蛾眉俯就旅店花筵

白蛇に同情する観客の声

(清)黄凶琰 観演雷峰塔伝奇

私は雷峰塔伝奇三十二齣を作ったが、これは慈音から塔圓までであった。脱稿後まもなく、俳優たちが上演したいと申し出てきた。すると、ある物好きが「白娘子、子を生み、科挙に合格する」という続編を作った。芝居の旧套に墮し、観衆に媚びるだけのものだったが、呉越地方で大流行となり、燕趙地方に及んだ。

看山閣樂府

雷峰塔上卷

慈音

峰泖蕉窗居士填詞

菩薩鬘禽聲如語花如笑試吹鐵笛翻新調何必
認爲眞漁人莫問津 愛聽閒說鬼癖與坡仙比
勿謂妄言之多因情太癡

慶清朝慢末扮韋馱上再世菩提自成妖孽原來
宿有根源同泛湖山烟水巧合機緣自此兩相心
許贈金陡起顛連竄牢城蛾眉俯就旅店花筵

白蛇に同情する観客の声

(清)黄凶琰 観演雷峰塔伝奇

ああ、芝居は状元が出なければ団
円しないというのは世の常。私もと
きにそれに倣い、俗を免れぬことも
ある。しかし、この芝居だけは断じ
てそうあつてはならない。なぜなら
白娘は妖蛇だからである。衣冠の列
に入つて、いったいどこに身を置こ
うというのか。

看山閣樂府

雷峰塔上卷

慈音

峰泖蕉窗居士填詞

菩薩鬘禽聲如語花如笑試吹鐵笛翻新調何必
認爲眞漁人莫問津 愛聽閒說鬼癖與坡仙比
勿謂妄言之多因情太癡

慶清朝慢末扮韋馱上再世菩提自成妖孽原來
宿有根源同泛湖山烟水巧合機緣自此兩相心
許贈金陡起顛連竄牢城蛾眉俯就旅店花筵

白蛇に同情する観客の声

(清)黄凶琰 観演雷峰塔伝奇

観衆もきつと鼻を掩い、その穢しさを避けると思っていたが、意外にも宴席でのご祝儀が跳ね上がるという不可解な結果となった。

：：蘇州ではいまも原作どおり一字も改竄せずに上演するものもあるが、惜しいことに世間の好みとは合わないらしい。状元の団円がないからだという。

看山閣樂府

雷峰塔上卷

慈音

峰泖蕉窗居士填詞

菩薩鬘禽聲如語花如笑試吹鐵笛翻新調何必
認為真漁人莫問津 愛聽閒說鬼癖與坡仙比
勿謂妄言之多因情太癡

慶清朝慢末扮韋馱上再世菩提自成妖孽原來
宿有根源同泛湖山烟水巧合機緣自此兩相心
許贈金陡起顛連竄牢城蛾眉俯就旅店花筵

1600BC
1500BC
1400BC
1300BC
1200BC
1100BC
1000BC
900BC
800BC
700BC
600BC
500BC
400BC
300BC
200BC
100BC
0
100
200
300
400
500
600
700
800
900
1000
1100
1200
1300
1400
1500
1600
1700
1800
1900
2000

殷 1600BC頃-1046BC		
周 1046BC-771BC		
春秋戦国時代 770BC-221BC		
秦 221BC-207BC		
漢 206BC-220AD		
魏 220-265	蜀 221-263	呉 222-280
晋 265-316		
五胡十六国時代		東晋 317-420
北朝 439-589		南朝 420-589
隋 581-619		
唐 618-907		
五代十国 907-960		
遼	北宋 960-1127	
金 1115-1234	南宋 1127-1279	
元 1271-1368		
明 1368-1644		
清 1616-1912		
中華民国 1912-1949		
中華人民共和国 1949-		



(唐)「李黄」(『博異志』)

(明)「白娘子永鎮雷峰塔」

(清)黄凶秘「雷峰塔伝奇」

(清)方成培「雷峰塔伝奇」

「解説」
 ハッピーエンドへの改作
 黄凶秘が出版した雷峯塔伝奇は、
 観客の要望を受け、それから四十年
 後、新たな脚本を生み出す。一七七
 一年に方成培が出版した雷峯塔伝奇
 である。

ハッピーエンドへの改作

〔解説〕

観客たちの要望を受け、一七七一年に方成培が出版した『雷峯塔伝奇』には、「端陽」「求草」など白蛇のひたむきな愛情を描いた場が加えられ、川劇「白蛇伝」の原型となった。

塔叙

祭塔

提婚

佛圖

雷峯塔傳奇卷一

岫雲詞逸改本

海棠巢客點校

第一齣 開宗

臨江仙末上西子湖光如鏡淨
幾番秋月春風今來古往夕陽中
江山依舊在塔影自凌空
多少神仙幽怪相傳故



雷峰塔

Q

「質問」 前回第八場まで見た川劇『白蛇伝』の結末は、どうなったのですか？

ハッピーエンドへの改作

(清)方成培 雷峯塔伝奇

法海との戦いに敗れた白蛇は杭州に戻り、断橋で許宣と再会する。白蛇は男子を産み、許士麟と名付けた。

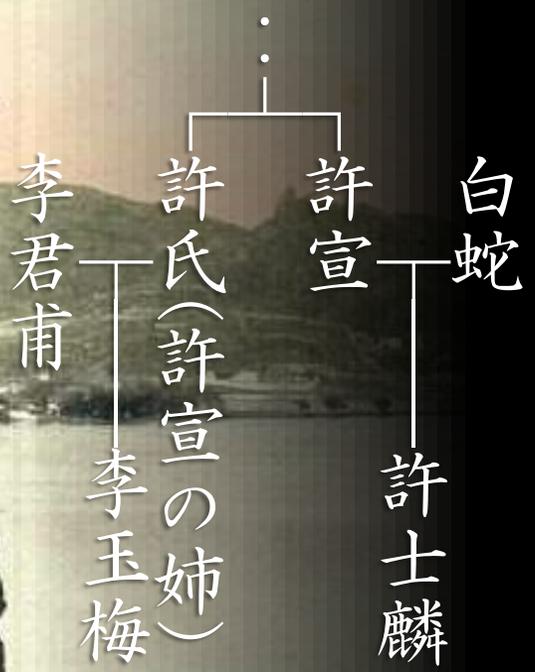
法海から前世の因縁を知らされた許宣は、白蛇を雷峰塔の下に鎮めることに同意し、法海とともに仏のいる天界へと去っていく。

雷峰塔

ハッピーエンドへの改作

(清)方成培 雷峰塔伝奇

両親を亡くした許士麟は、許宣の姉の家で育てられる。苦学の末、状元(科挙の首席合格者)となった許士麟は、皇帝の許しを得て、雷峰塔で母を祀り、従姉の李玉梅と結婚する。許士麟の孝心に心打たれた仏は、法海に命じて、白蛇を雷峰塔から解き放し、天女として天界にもどることを許す。



雷峰塔



なぜ人々は白蛇に同情したのか？

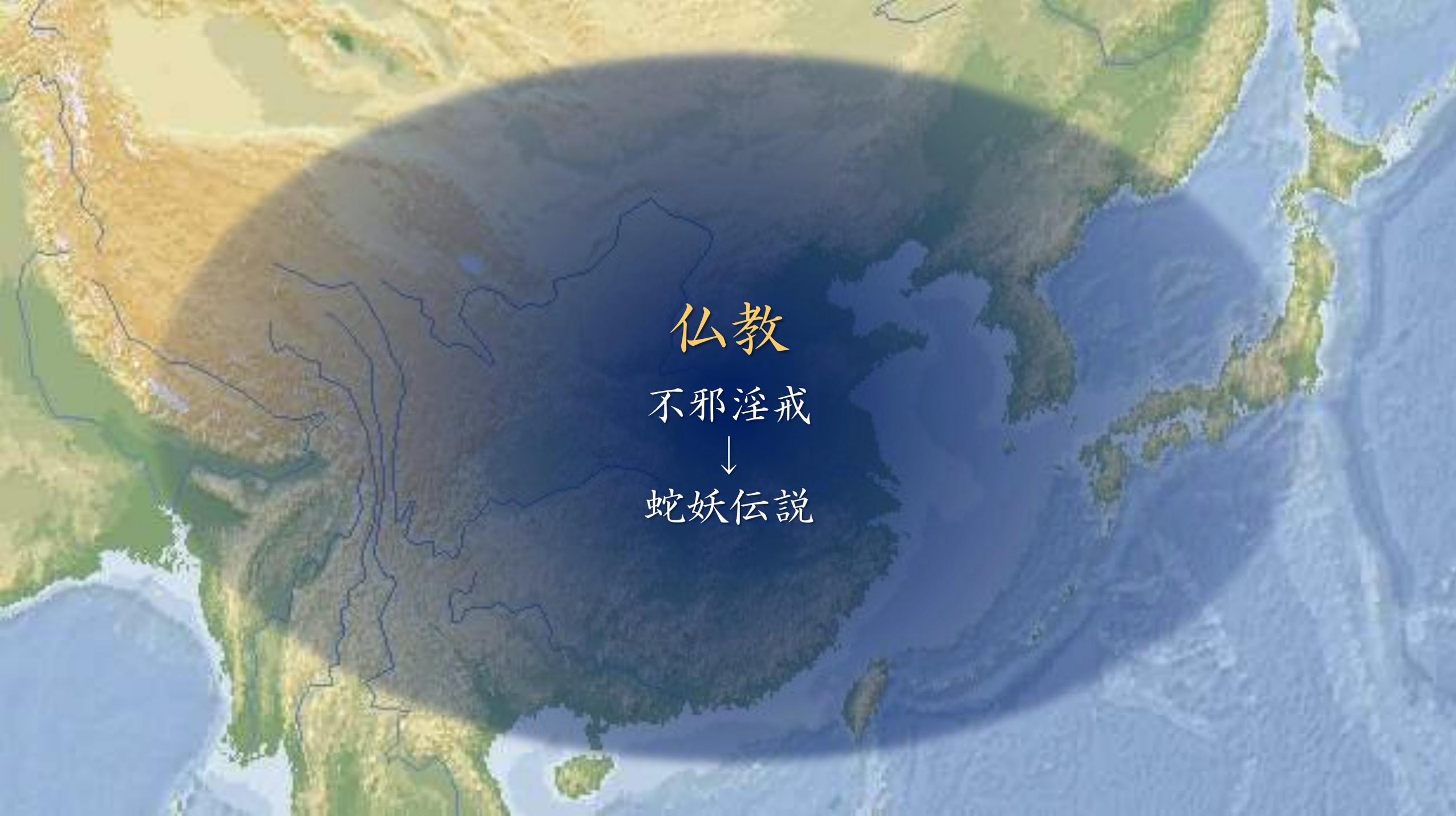
アニメミズムと異類婚姻譚

〔解説〕

東アジアでは、古来、万物に靈性を認め、自然との共生を求めるアニメミズムの信仰があり、その精神世界は異類婚姻譚として人々の間に語り伝えられていた。

「鶴の恩返し」で知られる鶴女房や狐女房・蛤女房などの日本の昔話も、こうしたアニメミズムの精神世界を反映したものである。



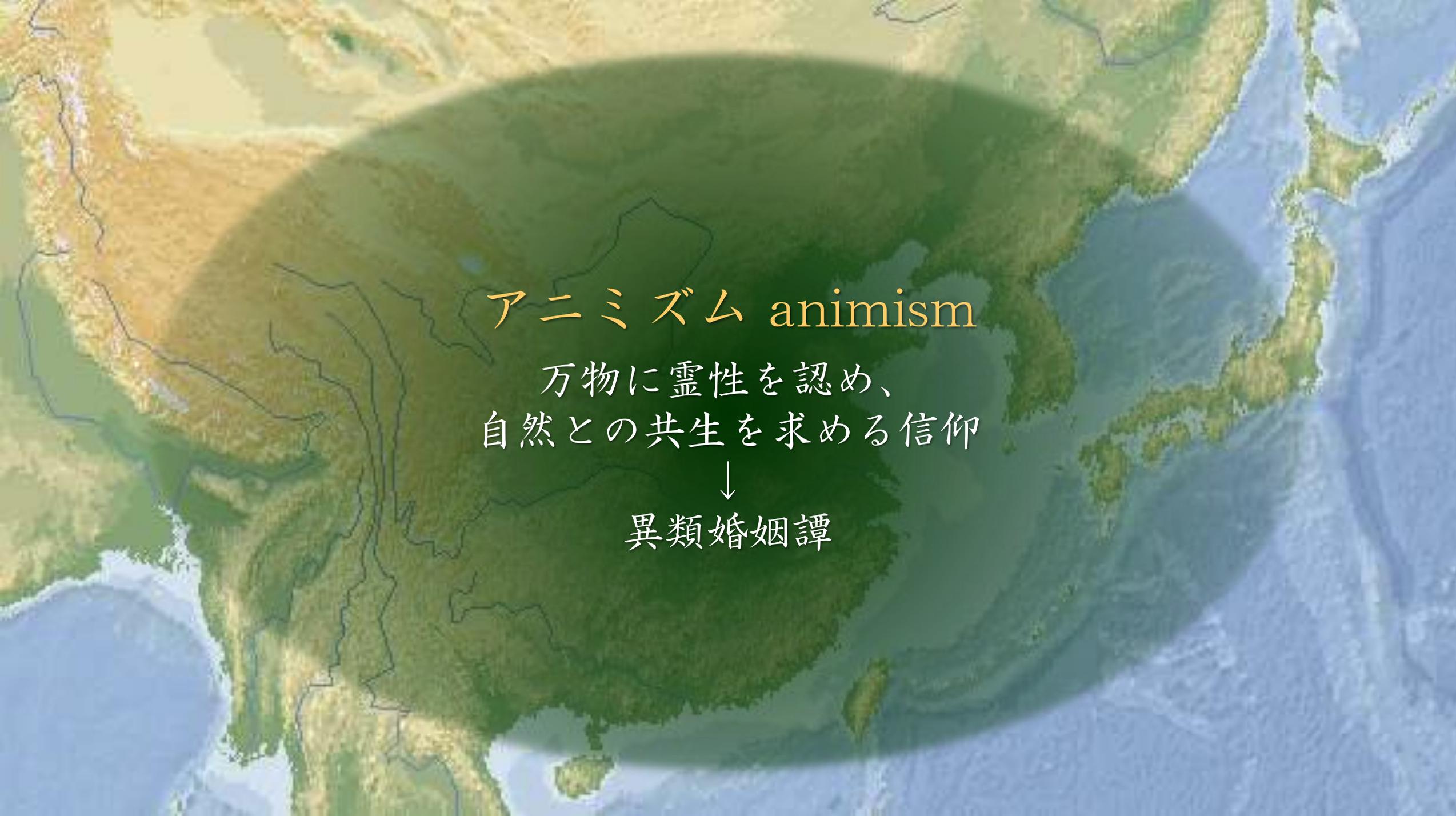


仙教

不邪淫戒



蛇妖伝説



アニミズム animism

万物に靈性を認め、
自然との共生を求める信仰



異類婚姻譚



中国には蛇と人間の恋を描いた
異類婚姻譚はあるのだろうか？

中国の異類婚姻譚

〔解説〕

〔清〕錢泳（一七五九〜一八四四）の隨筆集である『履園叢話』には、中国のアニミズムから生まれた蛇女房型の異類婚姻譚「蛇妻」が収められている。錢泳はこの話を乾隆年間（一七三五〜九六）の初めに湖州歸安阜菱湖鎮（現在の浙江省湖州市菱湖鎮）で起った事件と伝えている。

林華漢居士筆

履園叢話

述德堂藏書

履園叢話序



履園主人於灌園之暇就耳目所睹聞著叢話二十四卷間以示予曰吾以是遣愁索笑也孫子讀而歎之曰此非遣愁索笑之爲也先生欺予哉主人改容起曰噫子知我者試爲我序之其曰舊聞識國初軼事備野乘也曰閱古釋所見三代秦漢以來法物而資小學也曰考索雜取





杭州

湖州菱湖鎮

蛇妻——中国の異類婚姻譚

蛇妻（清） 錢泳履園叢話十六精怪

湖州歸安鼎菱湖鎮の某は碗を売るのを業としていた。一人の美しい妻を迎えたが、働き者の儉約家で、どこか常人離れしたところがあつた。

ある日のこと、妻がいった。

「このような商いをなさつていても、ひもじい思いをするだけです。わたしの言葉を信じてくだされば、きつと豊かになれますよ」

そこで夫は古い商いをやめ、妻の言葉に従つて新しい商いを始めた。すると十年も経たないうちに大金持ちになつた。

樞華溪居士輯

履園叢話

述德堂藏書

蛇妻——中国の異類婚姻譚

蛇妻（清） 錢泳履園叢話十六精怪

子供が二人生まれたが、どちらも聡明だったので、先生を招いて学問をさせることにした。

妻は毎年端午の節句になると、きまって病気になり、部屋にこもって人に会おうとしなかった。夫にはそれがなぜかわからなかった。

長男が九歳になったばかりのところ、たまたま母のところに行くとき、大きな青蛇がベッドの上でとぐるを巻いていた。驚いて悲鳴をあげ、逃げようとしたが、振り返ってみるとそれは母であった。

樵華溪居士輯

履園叢話

述德堂藏書

蛇妻——中国の異類婚姻譚

蛇妻（清） 錢泳履園叢話十六精怪

先生にそのことを告げると、田舎教師は災いが起こるといって、その夫を脅した。妻はそれを知ると怒っていった。

「これは我が家のこと。先生とは関わりないことではありませんか」
そして、その夜、忽然と姿を消してしまった。

乾隆初年の出来事である。

樸華溪居士輯

履園叢話

述德堂藏書



日本にも蛇と人間の恋を描いた
異類婚姻譚はあるのだろうか？

蛇女房―日本の異類婚姻譚

一人の若者に助けられた蛇が、美しい娘に姿を変えて若者と夫婦になる。娘は妊娠し、産屋に入って子供を生むが、若者が娘との約束を破って産屋の中をのぞいたために蛇の正体を見られてしまう。娘は、自分も助けていたただいた蛇で、池の主であると告げ、子供を育てるためにと片方の目を置いて去る。

稲田浩二ほか編 日本昔話事典 弘文堂



脚本
監督

熊谷
勲

協力
松竹映像株式会社

「蛇女房」 (日本の民話シリーズより 09:36)

蛇女房―日本の異類婚姻譚

その目が有名となり、殿様に召し上げられてしまう。若者が池にいくと片目の蛇が現れ、もう一方の目を与え、これで盲目となってしまうので時がわからないので、寺に鐘を寄進して朝夕に撞いてくれと頼む（または若者と子供を安全な場所に逃がした後、洪水を起こして殿様に復讐する）。

稲田浩二ほか編 日本昔話事典 弘文堂





「蛇女房」 (日本の民話シリーズより 02:34)

白蛇伝の謎

二、なぜ蛇に同情するのか？

東アジアには、万物に靈性を認め、自然との共生を求め、アニミズムの信仰があり、その精神世界は仏教の蛇妖説話とは対照的な異類婚姻譚として人々の間に語り伝えられていたため。



白蛇伝の謎

一、なぜ蛇と人間の恋愛なのか？

二、なぜ蛇に同情するのか？

三、この話は、人々に何を伝えよう
としているか？



〔清〕蒲松齡『聊齋志異』の世界

〔解説〕

明末清初に生まれた蒲松齡（一六四〇—一七一五）は、異民族支配の下、家運を再興しようとして科擧を志し、十八歳で秀才となる。しかし、その後は何度受験しても合格できず、不遇の生涯を終えた。その間、彼は家塾の教師などをしてしながら、民間に伝わる伝承を集め、『聊齋志異』という短編小説集を編んだ。その中にはアニミズムの世界観を反映した民間伝承が数多く記録されている。

聊齋志異

本の妖精——聊齋志異「書痴」

〔梗概〕

勉強ばかりで世間知らずの若者の前に、突然一人の美しい女性が現れる。女性は本の妖精だった。妖精は若者に囲碁や音楽、愛の手ほどきをしながら、勉強以外にも大切なことがあることを教える。二人は夫婦となり幸せに暮らしていたが、ある日、噂を耳にした役人が、妖精をわがものにしようとして若者を捕らえてしまう。



本の妖精——聊齋志異「書痴」

〔梗概〕

妖精は難を逃れるため、本の中に身を隠すが、怒った役人は本をすべて焼き捨ててしまう。妖精のおかげで成長をとげた若者は、科挙に合格し、この役人の故郷に赴任した機会に、その不正を暴き、財産を没収する。妖精のために復讐を果たした若者は、官を捨て故郷に帰っていった。



白蛇伝の謎

三、この話は、人々に何を伝えよう
としてしているか？

この話はアニミズムの世界観を
背景に、異類である白蛇のひたむ
きな生きざまを通じて、私たち人
間はいかに生きるべきかを伝えて
いる。





仏教説話からメルヘンへ

東アジアでは、仏教が普及した後も、万物に靈性を認め、自然との共生を求めるアニミズムとその精神世界を物語化した異類婚姻譚が、人々の心に息づいていた。

許仙と白蛇の物語を、邪淫を戒める仏教説話から人間と蛇のメルヘンに変えたのは、東アジアの人々の心に息づく、こうしたアニミズムの世界観であった。

まとめ

唐代の博異志に記された「李黄」や平安時代中期の大日本法華経験記に記された「紀伊国牟婁郡悪女」などの蛇妖伝説は、邪淫を戒める仏教思想を説話化したものであり、明代の短編白話小説「白娘子永鎮雷峰塔」や日本の道成寺縁起絵巻も、その流れを汲むものである。

一方、東アジアには古来、万物に靈性を認め、自然との共生を求めるアニミズムの信仰が人々の心に息づいていた。白蛇の物語が演劇化されると、人々はその精神世界を物語化した異類婚姻譚によって、白蛇をヒロインとする新たなメルヘンを誕生させた。